



漢詩を味わう

第61回

小園 其の三 陸游

村南村北鵲鳩聲

村南村北 鵲鳩の聲

水刺新秧漫漫平

水 新秧を刺して 漫漫として平らかなり

行遍天涯千萬里

行くこと天涯遍く 千万里

却従隣父學春耕

却つて隣父に従つて春耕を学ぶ

村の南でも北でも雨を知らせる鵲鳩鳥の音がする。

田の水には新しい苗が突き出て果てしもなく平らに広がっている。

かつて天の果てのように遠い地方を千万里も旅してまわったこの私だが、今は隣のおじさんについて春の野良仕事を勉強している。

《鵲鳩》 別名を祝鳥といい、鳴き声の変化で雨を知らせるといふ鳥。
《新秧》 田に移されたばかりの苗が、水面から突き出ているさま。
《漫漫》 水のはてしなく広がるさま。
《天涯》 空のはてのようにはるかな土地。
《却》 にもかかわらず今度は
《隣父》 隣のおやじさん。父は年長者をいう。

陸游（号放翁・一一二五～一二〇九）が生きた南宋王朝は、北から圧力をかける金軍に苦しみ、金に対して貢物を送り続ける屈辱的な和議を結んでいました。陸游はこのような政府の弱腰に我慢ができず、抗戦することを唱える主戦論者でした。陸游は十六歳から四度科挙に挑戦し、三十歳の殿試では最高の成績でしたが、金との和議を結んだ宰相秦檜に合格者名簿を改竄され、ついに進士に及第できませんでした。その後の役人生活は、地方の副知事止まりで、また何度も免職の憂き目にあい、中央に出ても史料編纂官程度で終わりました。

この詩は陸游五十七歳のとき、故郷の浙江省紹興で詠じた三首のうちの一つです。前年、任地の撫州（江西省）で飢饉があり、陸游は上司の命令を待たずに農民たちに役所に蓄えていた米を分け与えました。このことよって三度目の免職となり、故郷の紹興に戻ります。以後六十二歳の春までの五年間を故郷で過ごします。

まず農村の明るい情景が目につきます。田植えが終わり、鳥の鳴き声が聞こえ、水面に瑞々しい緑が広がるのどかな田園風景。そして「行くこと天涯遍く千万里」と、官吏として有能でありながら、蜀の地方廻りをするという自分の来し方を振り返り、感慨にふける陸游です。故郷での穏やかな田園生活は、彼の心を安らげてくれたことでしょう。

陸游は「六十年間万首の詩」と七十七歳の詩「梅花の下に小飲して作る」で詠っていますが、生涯を通じて一万四千首余りの詩を作っています。陸游の詩には夢と追憶をうたうものが多く、抒情的な詩人と言われていますが、一方で、国を憂いながらも官吏として何度も挫折を味わった悲憤の詩も多く、愛国詩人として現代でも高く評価されています。

参考文献・漢詩大系第三巻陸游（集英社）・中国詩人選集陸游（岩波書店）・NHK漢詩紀行

午路涼しき処を尋ね 松根に暫く箕踞す 詩を題せんとして小箋を展べしに 忽ち風に吹き去らる。

午路尋涼處松根暫箕踞題
詩展小箋忽被風吹去

《大意》真昼の道行に涼しい処をさがし、松の根方にどっころしよ。詩を書きつけようと紙をひろげたら、忽ち風に吹き飛ばされた。(菅茶山詩・日間即事)

道は無窮なり

道無窮

道無窮

《大意》道は極まりない。「学道の人、もし悟りを得ても、今は至極と思ひて、行道を罷むことなけれ。道は無窮なり。……」(正法眼蔵隨聞記)

読み
水は善く万物を利す（水はあらゆるものに利をもたらす。「老子」）

水
善
利
萬
物

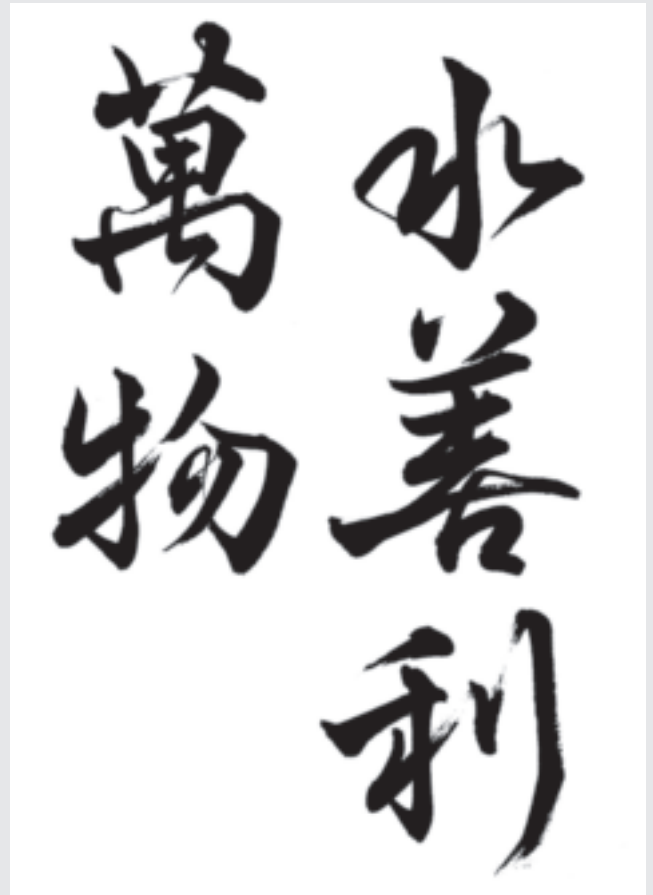
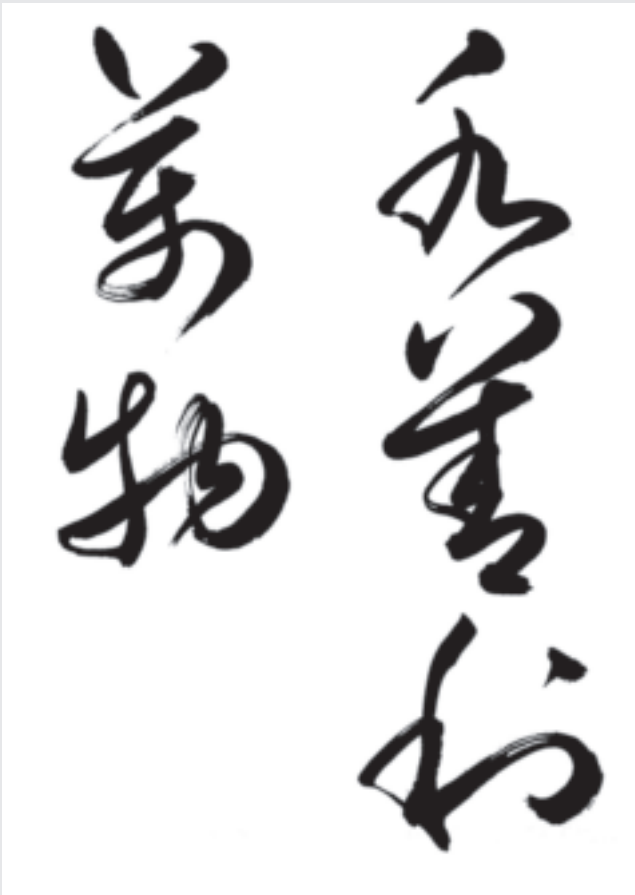
佐藤象雲書



- ・一般部規定課題出品について
- ・規定課題は段級の区別なく、右掲載の五字句となります。
- ・初段以下の方に限り、左に掲載してあるように二文字または三文字でも構いません。
- ・規定課題(楷書)の出品はひとり一点に限ります。

草書

行書



※成家・師範の随意作品出品は二点までです。

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

次号課題

隸書



碁局^{きぎよく}長夏を消す

(両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと)

支部		順位		氏名	
<p>お手紙拝見したました</p>					
<p>緑のかげもようやく色濃く</p>					

和泉溪石先生書

謂語助者焉哉乎也
謂語助者焉哉乎也
謂語助者焉哉乎也

佐藤象雲書

音

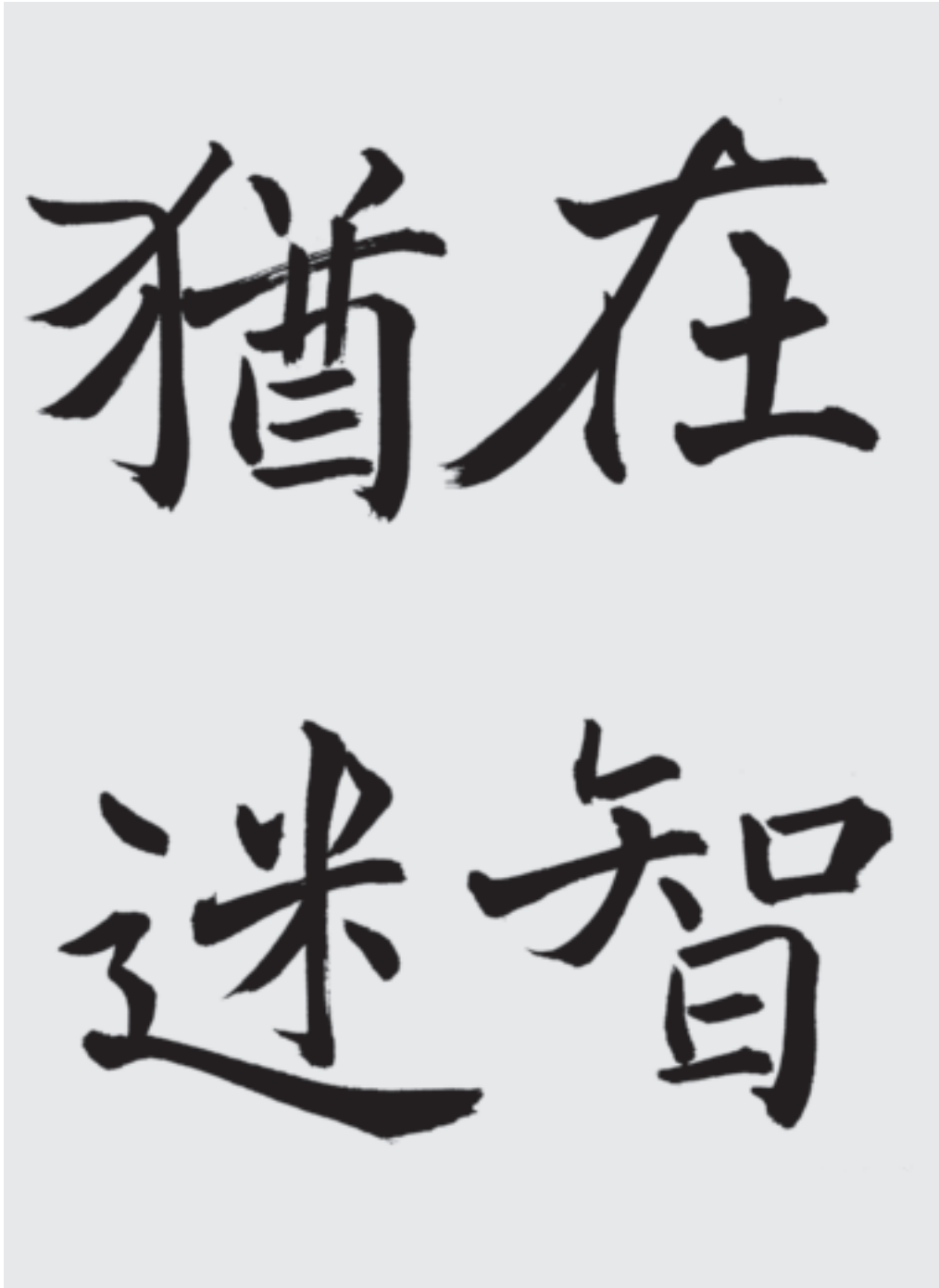
イゴジョシヤ
エンサイコヤ

略解

すべての文章にはたすけことばというものがあり焉・哉・乎・也などがある。これを会得すれば文章は上達する。

在智猶迷

智に在りても猶お迷うを……

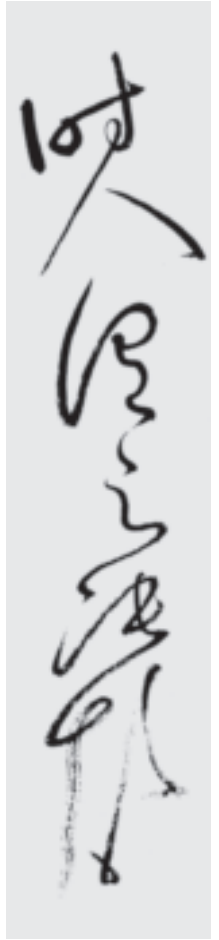
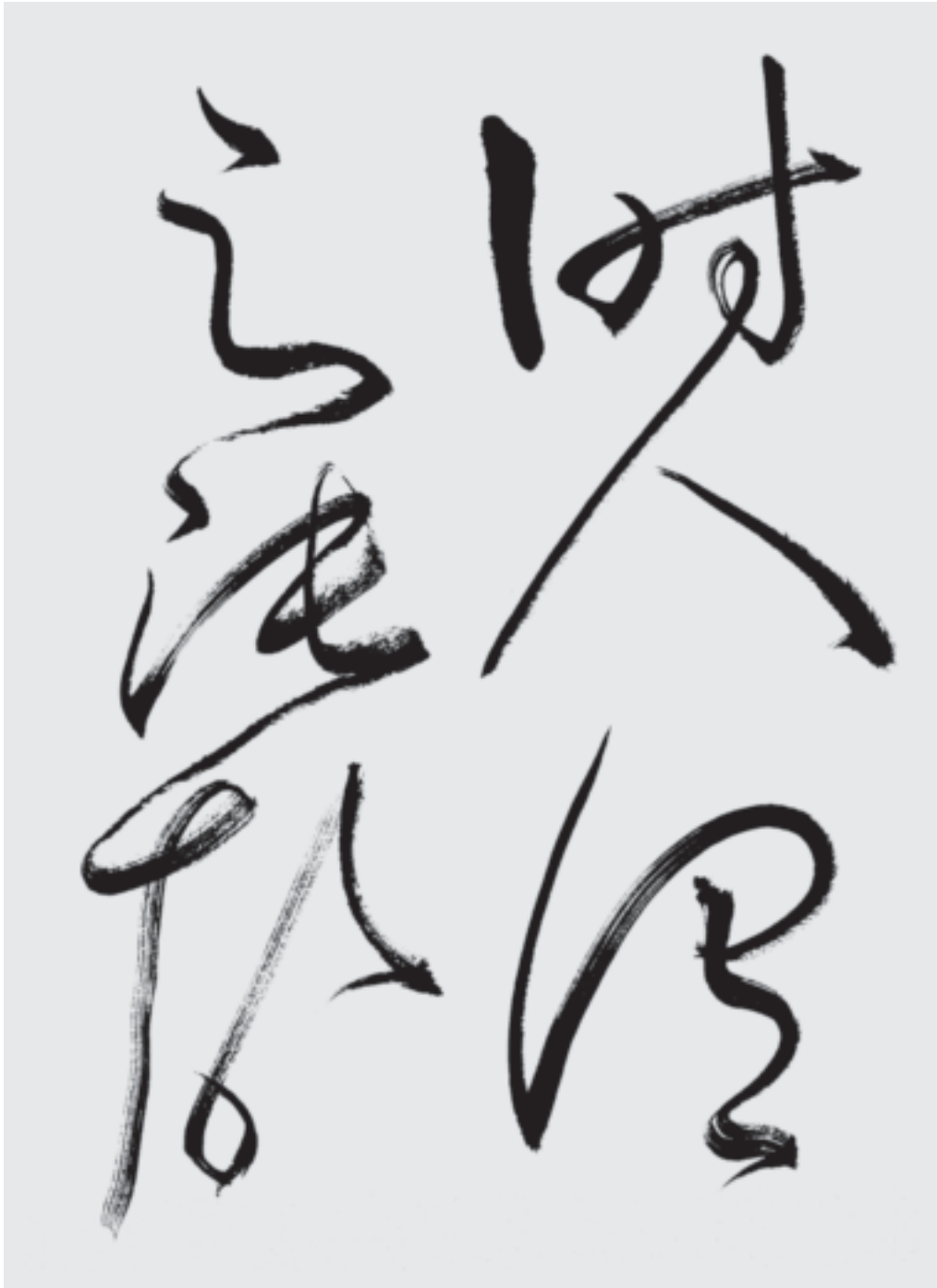


象雲臨

■ 褚遂良・雁塔聖教序 (初唐・西暦六五三年) の臨書 (18)

『在智猶迷』

明治時代、多くの漢魏六朝の碑帖を携えて来日し、日本の近代書道に多大な影響を及ぼした楊守敬(一八三九―一九一五)という書家があります。彼はこの雁塔聖教序について、過去に言われていた「美人嬋娟(美人であやか)、羅衣に勝へず」というものではなく、「鉄線の結成する如しといふべきもので、篆隸草の法を合成してこの妙境を打開したものの。」と言っています。行意を含み、鞭のように撓いで一見軽やかに感じる雁塔ですが、実際は鉄を折り曲げたような強い線で、それまでの様々な書法を駆使してこの妙境に到達しているという訳です。また欧陽詢や虞世南など褚遂良以前の書人が主張した書法を全部周知したうえで、初唐の書風を極めたものと評価します。この楊守敬の言葉を念頭において、軽薄な線にならないように注意したいものです。



時人、之を張顛と謂う……

象雲臨

■ 懷素・自叙帖 (中唐・西曆七十七年) の臨書 (10)

『時人謂之張顛』

孫過庭書譜の一節に「草は点画を以て形質と為し、使転を情性と為す。草は使転に乖けば、字を成す能わず。(草書は点画が性情であって、筆の動きが構造の本体となっている。だから、草書は筆の動き方が少し違っただけでも文字にならない)」という一節があります。このことは草書学習の上で非常に大切なことです。楷書のように形だけに拘るということは、既に草書の本質を逸脱しているということになります。古典の情性を思えば、形質の異なったものとなり、形質に努力すれば情性のない無味乾燥なものとなる。特にこの自叙帖のような、運筆が大きく速度感がある草書古典の臨書はこのことを実感させられますが、筆の動きを第一に考えて取り組んでください。

さて、この自叙帖は十回目となりましたが、今月で終了とします。次回からは、また長年本会が取り組んできた、冒頭で触れた孫過庭書譜に戻って勉強していきます。